

猪犬と登る猪猟の頂点へ

猪猟の上級編 ⑪

田宮 治

胸突き八丁

決して平坦ではない猪猟への大^だ道も、いよいよ頂点を目前にして突き付けられる難行苦行は大変なものである。まさに胸突き八丁（富士登山で頂上付近の八丁へ約八七二^ド）の険しい急斜面の登り道のこと。物事を達成する直前の最も苦しい正念場のこと）である。

できることなら、山彦会千葉支部の若者たちには、そんな難行苦行は避けてもらって、私が長年かけて編み出した「俺流猪猟の近道」に乗せて一秋ですんなりと頂点に立たせたかった。しかし、現実にはそんな思いが罷^まり通るほど生やさしいものではなかった。「一秋で猪猟の達人にしてやり

たい」と目論んだ私の努力も頑張^だりも、目的の頂点を前にして、あと一步の決め手である「俺流の極意」が十分に押し出せず、若者たち^ちにこの大技を克服してもらえなかったのである。

極意とか、大技といってみたところ、私でさえできたものなの^のである。しかも、猪猟で使う一番安全で安心できる要の技であるので、誰にでも簡単に受け継げるもの^のと思っていた。

猪猟の醍醐味や田宮系猪犬の真^ま価を、私が繰り返す実戦で心ゆくまで吟味して、その上で若者たち^ちには、さらなる高嶺を目指して猪猟道を進化・改善の味付けをしてもらいたい。そして、自分たち^ちで作り上げた猪猟道は実戦の場で磨き鍛えて、若者ならではの新しい猪猟道を編み出してもらいたい^の

だ。

私に突き付けられたこの二秋の目標は、まさに若者たちの成長を極限まで高めるために猪止め現場を何度でも提供することであり、願わくば、二秋で私を超えた立派な猪猟人となって、若者らしい新しい猪猟道を構築してもらおうことである。そして、この楽しい猪猟の新世界を次世代に繋いでもらいたいのである。

猪猟をどんなに進化・改良したところで、最大の目標はいかにして猪を上手に撃ち獲るかである。奇麗ごとを幾つも並べてみたところで、猪が獲れない戦術では仕方がない。

あくまでも、この考えは結果論だが、全く猪猟を知らない若者たちを、一秋で猪猟の頂点に導くとなれば、猪猟の枝葉部分は抜きにし

て、一気に根幹を伝って頂点に立たせる以外にない。

達人ならばすぐに分かる枝葉部分や、大事な猪猟の根幹だが、若者たちには、なかなか理解してもらえないのである。どんなに優れた理想論よりも、ただ一頭の猪を撃ち獲り、実績を積み重ねる現実の大切さを知るのが実戦である。

猪猟の世界は、今でも他人を受け入れない排他的な領域であり、猟法も技術も常識や定石はないに等しい。そんな中で人様を教え導くとなれば、誰が見ても天下に恥じない正しいものでなければならぬ。たかが猪猟であっても、これは並みの覚悟や頑張りのできるものではない。

私は若者たちに一秋で人並みの猪猟人になってほしいので、猪猟法を指導するからには損得抜きで



(上) どの仔犬の猟能もきちっと固定した素晴らしいものになっている。これも五頭や十頭から作っているのではなく、犬舎全体の犬群の中から相性を吟味し、猪猟人の目で見て仔犬を作っているからである(チヒロ号×ヨシ号)



(中) 毎日の綱引きは、たとえ一流犬になろうと猟期中でも続く。夜になっても自宅前の農道の散歩道には、巨人軍のグラウンドの恵みの照明(下)がともる(シロ号と武蔵号)。猪犬仕上げのポイント、綱引きがすべてである。毎日毎日1日も休まずやるのが大事で、夜遅くなったり雨風の日もやり続けるところに名犬の道がある。簡単なことだが、やり続けることが肝心だ。休まず何年も続けるのは思のほか大変なことである

やりたい。

「何を聞かれても猪猟のことなら任せなさい」と、公言できる立派な猪猟人に成長してもらいたくて、この難行苦行の山積する猪止め猟の極致に踏み込む二秋目の延長戦に突入した。そして順次、猟法を高めながら腕を磨き、懸命に頑張ってきたのである。

基本的には一秋で、できずにやり残した大技・小技を緻密に検証

した。特に克服が難しい大事な止

め猪への寄り付き方や咬み止めた猪の撃ち方などは、俺流猪猟法では一見何でもない簡単な猪止め猟法のようにだが、山梨や群馬の猟場のように見通しが良く、ライフルが存分に使える決め技は一切通用しない千葉特有の猪猟法である。つまり、全く見通せない大藪の中で犬たちが止めた大猪に絶対に完勝するための特技なのである。

たがって、千葉の猪猟人は追

千葉の山はせいぜい二、三〇

〇くらいで、温暖なので葉の落ちない木々と真竹や篠の大藪続きである。猪はその中をバリバリと逃げるが、犬たちも猟人も猪は見えない上に動かないので、ここで戦うのは至難の技である。

したがって、千葉の猪猟人は追

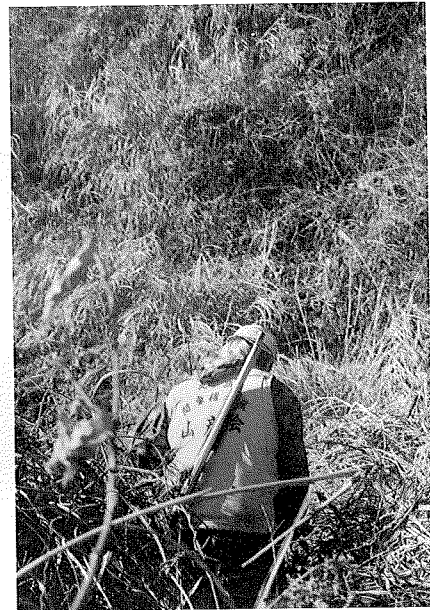
現して歴史も浅いので、猪猟法の

常識や定石も人それぞれなのである。ある勢子長は二十年間も猪猟をやっている、追い犬猟であったため、猪止め犬の寄せ鳴きも分かつ、止め刺しも初めてだった。

仲間のベテランでさえも、タツのすぐ下の谷で富士雄号が四時間も止めて激戦をしても気付かず寄り付かなかった。当然、大猪



(上) 高くはないが、この山を登っては下り、また登り、どこまでも猪を追う。平らに見えても谷はV字に落ちていて、スパイクもきかず、渡れない所が多い。猪を何キロも追うのは思いのほかきつい(千葉の猟場)



先頭を行く北嶋親方。なかなかの腕前になってきた。「あとひと踏ん張りだぞ。頑張れ！」

と一対一の決戦だったので、富士雄号は私が駆け付けた時は大けがを負い、完治するのに三カ月もかかったことがあった。

追い犬を使えば理解し、分かる常識は、追い犬をもって仕上がる猪猟法なのである。私の知る限り、藪中に分け入って止め猪と勝負できる猟人の話は千葉では聞いたことがない。それどころか、大藪が多く、戦いにくい危険な私たちのホームグラウンドには地元の人々は誰も入って来ない。大藪の激戦は猪だけに有利であ

り、猪犬の止め芸が凄一流芸でない限り、真竹藪での勝ち目はない。

地元猪猟人でさえも、「あんな大藪で犬が猪を止めたらおしまいだ。大けがをするか、犬が殺されるかだろうよ。どうして撃つのだ」と、北嶋氏によく聞いてくるそう。

私も初めの頃はそうだったのだ、その気持ちは分かるような気がする。だが実際にやってみると、猪猟の要はどんな猟場であっても、やはり猪止め犬群の実力次

第である。猪犬群の止め芸さえ確かなものであれば何の問題もない。主人がやろうと思う戦術は、何でも簡単にできるし、何回でも

望まれれば極芸(スーパープレ)も実践してお目にかけてくれる。

一 廉の猪猟人

千葉では大藪の止め猪を確実に撃ち獲る猪猟法も、藪中の激戦を絶対に勝ちに繋げる肝心要の極意までも、猪猟人それぞれのやり方

であり、確かな道筋はないようである。

そんな状況下で、二秋をもって猪猟の頂点を目指すとなれば、山梨や群馬で長年かけて編み出した猪猟法と、人生を懸けて作り出した自慢の田宮系猪犬の一流芸を原動力にして、人それぞれの猪猟道の既存概念や猟常識なるものを自らの実戦の積み重ねでぶち破っていく。

そして、確立した俺流の戦術と体験による実績を基に、進化・改良して構築した、揺ぎない猪猟の近道に乗せて何度でもできるまで具体的にやってみせて、覚えてもらう以外にはないのである。

「藪中の激戦」「二秋で頂点だ」あるいは「想定外の難所で決行して成功しよう」と言うならば、やはり使う猪猟の技法は、日頃から使い慣れた自信のあるものを、ここぞと思うところで目いっぱい押し出して見てもらうことなのである。

「頂点だ」「一流犬だ」と、ことさら自慢したり、大技とか極意とかと空騒ぎしているのではない。

こんな難行苦行の状況下では、己が信じる、自分にできる最高の猪猟法を愛犬たちの一流芸に融合させ、限界の技法をもって上級編に挑戦して頑張っているということである。

そんな努力の甲斐があつて、若者たちは私の押し出す独断の俺流も難行苦行も、見事に乗り越えてくれた。あとはこの胸突き八丁の崖をよじ登って、頂点に立つための大事な鎖の一戦だけとなった。

振り返ってみると、一人でも多くの猪猟の同志に猪犬のあるべき勇姿と猪猟の道を示したくて、独自のタイトルを設定し、山彦会千葉支部の若者たちと一緒に登り詰めて挑戦していく様子を全国に発信し続けてきたのである。

図らずも、頼まれて「よし分かった」と空恐しいことを安請け合したのだが、山彦会千葉支部の若者たちは独断の押し付けに文句一つ言わず、よく耐えて順次腕を磨き上げ頑張っついで来てくれた。

誰でも信じてやり続けてさえいれば、必ずその努力の先に望みど

おりの極致が花開き、夢の頂点に堂々と立てるのである。

何としても関東猪犬山彦会千葉支部の若者たちを一廉の猪猟人にしてやりたいという一念で、自分ができる最高の猪猟道、つまり

これまでの実戦から学び培った俺流の止め猪猟法の近道に乗せて全力で押し進めてきたのである。

目標が頂点ともなると極めるのは至難の業である。一秋でやり残した課題も多く、しかも難題揃いで苦戦や難戦の連続である。

そんな悪戦苦闘を乗り越えたるためには、長年の経験で学んだ失敗と、挫折のどん底からよじ登って来た俺流の猪猟の近道をたどるのが一番安全である。こんな至難の実戦に立ち向かい必勝するのは、うってつけの有利な方法のようである。

私はどんな激戦の現場でも、困った時には原点に戻り、基本を忠実に検証し、その上でこの信じる俺流を押し出して、思いどおりの戦いをして完勝し続けてきたのである。

そして、平成二十三年の正月を

前にして山彦会千葉支部の若者たちは、やっと夢の頂点を目の前にきっちりと捉えるまでになつてくれた。

これで新年にかける最終目標は限りなく楽しいものとなつた。「よしよし、あとひと踏ん張りだ。一気に頂点まで引きずり上げてやるぞ」と、密かに心に決め、新年の課題として、頂点前の崖をよじ登るために絶対に必要な作戦に考えを巡らせていた。

目の前に崖として立ち塞がる難題は、どの現場でも猪を獲り過ぎていなくなったことである。どんなに優れた作戦であっても、猪がないのでは何の役にも立たない。しかし、残り少ない猟期であっても、その現実を甘んじて受け止め、打開策を精査して必ずあるはずの突破口を探し当てることである。

私が突き進む道で、居残っているグレ猪や猛猪に的を絞り込んでいる、大事な鎖となる作戦を練り上げたのである。

グレ猪や猛猪は実戦の場を何度も潜り抜け、見事に生き伸びた歴

戦の兵である。そんな戦いなれた逃げ上手な名物猪が猟期終盤ともなると、どこの現場にも必ず一頭くらいは残っている。

この名物猪と戦うとなると、犬たちの猟芸が一流でなければ勝負にならない。さらに作戦や猪猟人の腕前もピシッと決められる達人芸が要求される。ちなみに戦って相手に勝つということは、すべての点でグレ猪の能力より勝っていないければならない。

ここでいうグレ猪とは、百戦錬磨の技法をもった猪猟人との知恵比べに常勝している兵のことである。

つまり、この時期に残っている猪ともなれば、大物小物にかかわらず、例外なく猪猟人に追われられて強い猛猪に変身しているの、並みの作戦や犬芸で戦いを挑むと逃げられて当然で、最悪の場合には愛犬の死にも繋がることになる。

(つづく)

全編オリジナル
カ。パ。ツ

好評発売中 5000円(送料共)